

厚真町の未来を展く日本一の図書館へ ーまちづくりの核としての図書館整備ー

厚真町立図書館のめざすもの
日本の図書館の未来像

【第1世代】民主主義の図書館
GHQの指導により整備。民主主義下の図書館。
※国民に利用スキルがなく普及せず。

▼

【第2世代】本の貸出を重視
昭和38年に日本図書館協会による図書館モデル。
本の貸出数が評価軸となり、リクエストを重視。
日本中の公共図書館の多くが、この昭和型モデル。

▼

現在の公民館図書室は典型的昭和型モデル

↓

昭和型モデルの図書館からの脱却
(各地の図書館の共通する課題)

▼

【第3世代】滞在型の図書館
空間づくりを重視し、大人も子供も1日過ごせる
図書館。地域の集客装置としての期待も大きく膨ら
み1990年代頃から登場。後に「ツタヤ図書館」が
賛否両論

▼

【第4世代】問題解決型図書館
図書館本来が持つ機能を最大限活かし、地域づくり
の核となる施設と位置づける。地域や住民のあらゆる
課題に対応。
※2010年以降に日本の図書館を大きく変えた考え方

▼

【第5世代】未来創出型図書館
図書館の運営そのものが、ヒト・モノ・コトの交流
と人材育成・雇用創出・循環型経済を創出する、
ソーシャルイノベーションを起こす図書館。

▼

第4～第5世代の図書館を指向し、
厚真町の未来を展く日本一の図書館

文化交流施設の核となる図書館づくりにむけて

基本姿勢

- 図書館法
利用者の教養・調査研究
・リクリエーションに資する
- 自由宣言
ユネスコによる
「公共図書館宣言」
- 社会教育
一学生び続ける機会と場、
方法と情報提供

実現すること

- 生きがい
図書館に触れ、
多様な「生きがい」を感じる場
- つながり
人・物・事が交流し、
つながりを創出
- 課題解決
地域社会や町民が抱える
多様な課題解決に取り組む

めざすもの

- リベラルアーツ
町民の教養を担保し、未来を担う
人材を育てる本や資料の充実
- シビックプライド
厚真の歴史・文化に誇りをもち、
未来を共有する場
- ソーシャルイノベーション
町民自ら考え、助け合う
持続可能な社会づくりの核

厚真町立図書館運用計画の骨子(案)

目指す図書館像

- 【来館者数】年間30万人を目標
- 【開館時間】年間350日/9時～21時開館
- ・第4～5世代の図書館を目指し、事例や立地、各種シミュレーションから想定(文化交流施設全体を含む)
- ・年間30万人の来館者数を目標とし、未来型の図書館のトレンドを参考

体制づくり

- 【準備】組織横断型の準備体制が必須
- 【全般】ディレクター制の導入
- 文化交流施設の複合的な運用のためには、組織横断型の計画推進会議と、それを束ねる強力な準備室体制が必須。準備段階から実運用まで、独創性のあるディレクター制の導入も望まれる。

目指す蔵書数と選書

- 【蔵書数】最終的に8万5千冊程度の収蔵目標
- 【選書と納入】徹底的な見直しを検討
- ・最終的な蔵書目標数は8万5千冊程度(開6万/閉2.5万)
- ・オープン時は蔵書数は4～6万冊程度を想定
- ・現在の蔵書(6.4万冊)のうち5割は入替検討
- ・選書と配架編集、魅力ある本棚づくりが最重要
- ・納入は、地域経済循環モデルを検討

実現のための人員の目安

- 【準備室】室長(1)職員(2)+ディレクター
- 【運営時】館長(1)職員(3+4)+ディレクター
- システム等によるカウンター業務の効率化と共に、友の会などのサポーターの編成や課題解決レファレンスなどの人員の育成・確保が重要。

全国から人が集まる魅力ある本棚/図書館/文化交流施設

既存の図書室のイメージを脱却し
厚真町の未来を展く日本一の図書館へ

実現のための3つのアクション

- ツール(設備・道具)
 - ・既存概念にとらわれない斬新で編集的な書架
 - ・Webおよび紙メディアの充実による情報力強化
 - ・利用者が自由に過ごし、寛げる調度の導入
 - ・カウンター業務や司書業務を効率化するツール
 - ・編集を設計思想とする総合図書館支援システム
- ルール(規則・決事案)
 - ・フレキシブルな運用を可能とする図書館条例整備
 - ・図書館の既存イメージを払拭する館内ルール
→おしゃべり自由・飲食自由・撮影自由など
 - ・リクエスト対応ほか斬新な選書ルールの構築
 - ・NDC(日本十進分類法)に囚われない独自分類
- ロール(組織・役割分担)
 - ・役場の組織の枠を横断する人材の登用
 - ・町民協働によるサポーター組織の構築
 - ・民間活力や外部人材のネットワーク化
 - ・インターネットを駆使した交流人材の多様化
 - ・恒常的な人材発掘と育成の仕組みづくり

開館までのスケジュールの考え方

- 図書館をコアとし、多様な機能が組み合わさる文化交流施設の運営計画を推進するためには、管轄する部署が組織横断的な関係をつくり、関連部署の全てのメンバーが、オープンまでのスケジュール感を共有。
- スケジュールの主脈は、設計、施工、引渡のハード関連の進捗に合わせ、運営側のソフトに関わるスケジュール感を“見える化”して共有しながら、調整。
- 図書館のソフトに関するスケジュールは、資料の整理・選書・調達・移動・配架など、書籍をめぐる動きと、それを支えるシステム構築が主脈。
- 第4、5世代の図書館づくりにおいては、町民協働型の組織づくりと、未来に向けた図書館づくりが可能人材確保が重要。
- 北海道では、図書館人材が不足している状況で、常に人材確保と育成を考える必要がある。

